

# 身体活動から女性競技者が受ける影響：女子プロレスラーの経験

合 場 敬 子

## (要 約)

本稿は、女子プロレスラーがプロレスによって、どのような利益や不利益をプロレス以外の生活において得ているのかを考察した。女子プロレスラーの語りを分析した結果、彼女たちは、礼儀正しさや人への思いやり、身体的かつ（あるいは）精神的強さという利益を得ていた。さらに、闘う技能を獲得したことにより、身体的受動性を変容させていた。利益の中では特に、レスラーたちはプロレスをすることで、多くの女性が獲得できていない潜在能力としての身体的強さを獲得し、エンパワーメントしていた。一方、レスラーたちの中には、プロレスをする身体を獲得したことで、図らずも男性に間違えられるようになり、かわいい服が着られなくなるという不利益を経験していた。しかし、その不利益を深刻に受け止めるレスラーは非常に少数であった。むしろ、男性に間違えられるレスラーたちは、女性であるということを表示するような服装や髪形、体型を示さなければならないという日本社会のジェンダーの規範に、意識的ではないが対抗していた。

## 1. はじめに

本稿では、レスラーになってからの変化について女子レスラーに尋ね、それらの変化がプロレス以外の生活において、彼女たちに何をもたらしているかについて考察する。ただし筆者は、一部の女子レスラーたちが「闘う技能」（自分の身体に対する男性による暴力へ対抗するための身体的技能）の獲得によって、身体的受動性を変容させていることについて考察してきた（合場 2008）。したがって、本稿では、プロレスをする身体及び闘う技能の獲得を含めた、レスラーになってからの変化に対して焦点を当てる。このような点を研究する必要性は何か？ それは、スポーツに参加することによって、女性たちは様々な利益をスポーツから得ていることが明らかになり（Granskog 2003）、一部の利益はスポーツという枠を超えて、女性たちに影響を与えていることが示されているからである（Blinde et al. 1993）。日本において、女性競

技者がスポーツから受ける日常生活における影響については考察されていない。したがって、本稿が競技スポーツに類似した身体活動を行う女子プロレスラーを対象に、この点を考察することに意義がある。

## 2. 身体活動が女性に与える影響

ここで検討する先行研究は、競技スポーツだけでなく、筋力トレーニングなども含む身体活動が、それらの活動に参加している女性の身体活動を越えた、日常生活や今後の人生に与える影響を、利益と不利益の二つの側面から考察しているものである。多くの先行研究は、身体活動をする女性の身体と規範的な理想の女性身体との関係（例えば、George 2005）<sup>(1)</sup> や、身体活動の範囲の中での利益を主に考察している（例えば、Thing 2000）ので、それ以外の身体活動の範囲を越えた日常生活における利益や不利益について言及している研究は少なかった。限られた数の先行研究ではあるが、ど

のような利益や不利益が指摘されているか検討していく。

## 2-1 身体活動から得られる利益

英語圏での多くの研究は、現実的利益と心理的利益に言及している。現実的利益として挙げられていることは、重たい荷物をトラックから難なく降ろしたり (Scott-Dixon 2008)、重たいものを運んだりするとき他人の手助けを必要としないことである (Dowrkin 2003)。

心理的利益には多様なものが含まれる。街頭で暴力に遭遇しても、そこから逃げられるという自信 (Dowrkin 2003)、自分の身体に力がありそれによって何かができるという身体的自尊心 (Scott-Dixon 2008)、人生における積極的な姿勢の獲得 (McCaughy 1997) が指摘されている。

また、スポーツに参加した女性たちは、三種類の性質を得ていることを Blinde et al. (1993) が明らかにしている。それは、自分の身体を強く、能力があるとみなし (bodily competence)、自分自身を有能だととらえ (perceptions of a competent self)、自分の人生に対して積極的な働きかけをすること (a proactive approach to life) である (Blinde et al. 1993 : 51)。自分自身を有能だと捉えることは、さらに六種類の要素に分かれている。それらは、自分に与えられた状況下を統制できる能力があると信じること、高い自尊心、独立心、能力があり物事を成し遂げられるという感覚、スポーツ以外の厳しい状況を統制することができること、自己実現の感覚である。また、自分の人生に対して積極的な働きかけをすることは、「挑戦を求め、危険を冒し、目標を決め、何かを達成するための戦略を立て、自己主張することや競争的であることを心地よく感じる能力である」 (Blinde et al. 1993 : 54)。

## 2-2 身体活動によって生じる不利益

身体活動は利益だけを女性競技者に与えているのではない。彼女たちが身体活動をすることによって生じる不利益もまた存在する。まず、スポーツをする女性はレズビアン (女性の同性愛者) であるという偏見が存在するので、大学でスポーツを

やっているとただで、他人からレズビアンだと決めつけられてしまう (Blinde and Taub 1992)。このような偏見のため、女性競技者の中には、公的な場所で自分が女性の集団でいるところを見られないように常に注意したり、他の女性と公的な場所で、特に抱擁したり、触れたりすることに自覚的になっている (Blinde and Taub 1992)。他には、スポーツへの参加のために時間や金銭がかかること、家族責任との両立の難しさ、他者から特定のスポーツをやっていることに対して、否定的なコメントをされることが挙げられている (Migliaccio and Berg 2007)。

以上の先行研究で示された利益と不利益を、女子プロレスラーたちが経験しているか否か、また先行研究では示されていない利益や不利益を彼女たちが言及しているか否かを検討していく。

## 3. 研究の方法

本稿で分析の主な対象となるのは、2004年の春から2005年の秋までの間に実施した、25名 (うち引退者3名) の女子プロレスラーのインタビューである。ただし、インタビュー前後のレスラーの観察、レスラーと会話、試合会場でのレスラーの観察、女子プロレス団体の歴史や団体内の力関係などの知識に照らし合わせて、有効だと思われる語りだけを使って、総合的に分析している。

インタビューは半構造化インタビュー (質問内容はあらかじめ決まっているが、対象者の話の展開を尊重し、その話の流れに沿って、質問の順番を変えるインタビュー方法) で実施した。インタビューは、一人あたり2時間から3時間に及んだ。インタビューは、プロレス団体に入団する以前から現在までの人生において、身体の変化やプロレスの経験について質問した<sup>(2)</sup>。分析において、多くの質問に対する女子プロレスラーの語りを使っているが、特に本稿に関係する質問は以下のものである。

- 1) レスラーになった後、日常生活での行動や服装の変化はありますか？
- 2) プロレスラーになってから、強くなったと

思いますか？

3) プロレスをやる前はわからなかったことで、プロレスから学んだことは何ですか？インタビュー内容は録音し、専門家にテープ起こしを依頼し、録音内容とテープから起こされた文書データとの一致を筆者が確認した。データ収集過程で、筆者以外が行ったのは、テープ起こしのみである。

インタビューした当時現役だった女子プロレスラーのキャリアは、10年以上が6人、6年以上9年以下が10人、そして1年以上5年以下が6人となっている。彼女たちの年齢は20代が最も多く17人で、30代は5人であった。引退したレスラー3人は、すべて30代であった。尚、以下登場する女子プロレスラーの名前はすべて仮名で、最初は姓名で表示し、2回目以降姓のみで表示している。

## 4. 研究結果

インタビューの結果、レスラーたちはプロレスから利益や不利益を得ていることがわかった。まずレスラーたちがプロレスをすることによって得た利益から述べていく。尚、レスラーたちは自分の身体を「体」と表現しているのだから、彼女たちの語りの内容を示している部分は、「身体」ではなく「体」という語を使っている。

### 4-1 新人レスラーの経験

1994年の対抗戦の時代まで、多くの女子プロレス団体は、入団したての練習生を底辺に、概ね団体内の所属年数の長いレスラーほど頂点に近くという序列的な世界を形成していた<sup>(3)</sup>。プロデビュー前の練習生は厳しい練習を、プロデビュー後の新人レスラーは、厳しい練習に加えて、団体や先輩のための雑用をこなし、先輩との序列的な関係を耐えることが当然とされていた。ここでは、4-2、4-3で現れるレスラーたちの語りの背景となっている新人レスラーの経験を簡単に説明する。

入団した新人は練習生と呼ばれる。彼女たちは、プロレス特有の受け身や技の練習を最初からできないので、入団して数ヶ月は「基礎体」（基礎体力

づくりの略）に時間が割かれる（亀井 2000）。基礎体力がついてくると、受け身（相手の技を受けたり、自分で技を掛けた時に受ける衝撃を和らげる体勢）の練習とロープワーク（ロープを使った動き方）、技の練習へと移行していく。そして、スパリングを行い、プロテストに備えてゆく。プロテスト合格後、さらにデビュー戦に向けて、実践練習を積み重ねる。

練習生は「基礎体」をこなすことから始める。受け身の練習が始まるまでは、ほぼ一日中、基礎体をやらなければならない。基礎体の中身は、一般的な筋力トレーニングのメニューで、ブリッジ、腕立て、腹筋、スクワットである。入団前に長いスポーツ歴を持つ練習生以外の者たちは、基礎体の練習の大変さを語っている。雪下桐子も基礎体の練習は大変だったと言う。彼女が、最初にすぐ覚えているのが初日の練習である。練習第一日目、先輩に挨拶して緊張していた。そしたら、「じゃあ、おまえらスクワット500回ねって言われて、なんか、はあ？みたいな。今、なんて？」と思った。その数に耳を疑いつつも、やるしかなかった。スクワット500回という信じられない練習が毎日続くのだろうかと思っていたら本当に毎日続き、足が動かなくなったりした。基礎体で全身が筋肉痛になり、思うように体が動かさなくなった。練習生のころ、3階建ての寮の2階が自分たちの部屋だった。筋肉痛がひどくて、階段をまともに上がれず、「這（は）って、上（のぼ）ったり（笑い）下（おり）たりして」いた。松原も、「無理でもこう無理やりこう頑張ってるって感じだったので、・・・全身が筋肉痛になって、もう、座ったり、トイレとかが大変だったりとか、最初の一週間はすごい（ママ）つらかったです」と語る。桜井も基礎体で筋肉痛になった。しかし、次の日も次の日も同じ練習が続く。彼女は「いつになったら、これは、治る暇があるんだろうと思っ」たと言う。

早い人で、三カ月くらいたつと、団体によるプロテストを受け、晴れてプロレスラーとしてデビューすることになる。プロとして試合に出られるようになる一方で、プロレス興業を行うための

様々な雑用が命じられることになる。さらに、その仕事を通じて先輩との接触が始まる。三原によると、プロテストに受かる前も、リング作りとプロレス会場での売店の仕事（団体のパンフレットやレスラーのサイン入り色紙などを売る仕事）はできるが、レスラーの控室に入ることや先輩と話すことはできないという。なぜなら「プロ前ってというのは、プロレスラーじゃないから・・・仲間として扱ってもらえない」のだ。

プロデビューした新人レスラーには、セコンドという仕事加わる。セコンドの仕事にはレスラーの控室を設営し、特定のレスラーに付き添って、控室からリングまでの誘導、選手の衣装の管理、試合中の応援、凶器がある場合はその受け渡し、場外乱闘の場合は客をどかすなどが含まれる。

クラッシュギャルズ（長与千種とライオネス飛鳥が結成していたタッグチームで、1983年から1989年まで継続）が活躍していた時代から対抗戦までにセコンドを経験したレスラーの多くが、控室の設営には細かい仕事が多かったと語る。控室が1階の場合などは、外から覗かれないように、窓などに新聞などを張り付ける。先輩レスラーの荷物を移動のためのバスから下ろし、衣装を取り出す。さらに、対抗戦時代の全日本女子プロレス（全女）では「控室袋」というものがあり、必要なものが入っているか確認し、持参する。その袋から、控室の決まった場所に、ティッシュやドライヤーを置き、先輩ごとに座る位置などを決めていた。松原によると、このやり方は、対抗戦以降の他の団体では簡素化されてきているという。

控室からリングまで誘導する場合も、特定のレスラーが登場する前の試合を注視し、リングアナウンサーが試合中に時間経過を言うたび（5分、10分、20分などが多い）、何度もそのレスラーがいる控室に走っていき、試合開始からの経過時間を伝えなければならない。それを聞いて、次のレスラーが自分の出番に備え準備ができるからだ。

セコンドは先輩の衣装の管理にも気を使わなければならない。衣装を何着も持っている先輩の場合は、今日は何を着るのかを確認して準備する。さらに、先輩レスラーがリングに上がって、名前

を呼ばれ颯爽とガウンを脱いだら、桑名によるとそれを高級家具を扱うかのように丁寧に畳まなければならない。試合が終わったら、先輩が着た衣装を洗うのもセコンドの仕事である。

自分が出る試合に加えて、このようなセコンドの仕事プロデビューした新人はこなしていかななければならない。一所懸命やっても、先輩の要求水準に到達せず、先輩にいつも怒られていたと多くのレスラーたちは語る。「衣装を汚く置いたとか、衣装引きずったとか・・・（セコンドは大きな声で応援しなければならぬのに）声を出してなかったとか。（何をすることも走ってしなければならないのに）疲れて歩いているところを見られたとか」（三原）などあらゆる事で怒られていた。しかし、相応の理由があって叱責される以外に、先輩からいじめを受けて、やめていく新人も多かったと南優子は語っている。先輩からいじめや理不尽な扱いを受けたことをはっきりと語るレスラーは少なかったが、倉田みどりは唯一、理不尽な体罰を受けたことを語った。移動するバスの中で、ある先輩がバスの一番奥にいて、通路に新人を並ばせて説教をしていた。彼女はその先輩から最も遠い位置に立っていたので、先輩の話が実は全く聞こえなかった。聞こえない先輩に言うこともできないので、「はい、はいってこうみんながお辞儀するのに合わせて」、彼女もちょっと列から体乗り出して、頷く仕草をしていた。すると、彼女の横にいた先輩が「おまえ今話聞いてないのになぜいてただろうって言われて、すいませんつつたら、靴で顔面ばあーんって蹴られて鼻血がばあって出た」。その時は、「私そんなに悪いことしてない。じゃあ、どうやって話聞くんだよっと思って。それはすごい（ママ）理不尽と思」ったと言う。

なぜこのような理不尽なことが先輩によって行われるのかということ、女子プロレス団体の中では、先輩の言うことは絶対的に正しく、「先輩が・・・白い物でも黒だつて言ったら黒なんですよ」と、インタビューの時に机を叩きながら南が強調していた。このようなやり方を、南が所属していた団体の経営者も黙認していたという。なぜなら、有

名レスラーも、入団した頃は厳しい序列的な関係を耐えて、スターになったのだから、新人は苦勞して当然だという考えだったと南は語っている。

先輩が桑名真希の足を踏み、本来は先輩が悪いのに、桑名の方が「すいませんってゆっちゃう」。このように、先輩は絶対的な存在なので、先輩への態度や言葉遣いにはとても気を使っていたという。先輩への言葉遣いが悪いと、ミーティングで先輩から、「言葉遣い悪いて怒られ」た。

#### 4-2 礼儀正しさと人への思いやり

前節で記述したような厳しい先輩、後輩の序列的な関係を生き抜くことから、レスラーたちが得ていたのが礼儀正しさである（4人のレスラーが言及）。名取涼子は「結構礼儀正しいとか言われるのは、プロレスのおかげ・・・だなんて思いますね」と語る。桑名は、新人の頃、言葉遣いが悪いと怒られたことを今になって思い出すと、なんであんなことで怒られなければならなかったのかと反発も覚えるが、厳しくされたおかげで、プロレス界以外の普通の人と接する上でも役に立っていると思う。だから、プロレス界に身を置くことで礼儀正しさを身につけることができ、今は「それはすごい（ママ）良かったと思う」と語る。金沢もプロレス界で身に付けた礼儀正しさやキャリアが長い人に対する丁寧な態度が、今の職業でも評価されていると語っている。実際、レスラーたちにプロレス会場で出会うと、何時も元気な声で筆者に挨拶し、インタビューの前後も丁寧に挨拶をしてくれた。

礼儀正しさの他に小田切麻帆が得たものは、「人のありがたみ」だという。先輩にはいつも敬意を払わなければならない、かつ厳しく指導される関係だったので、それが嫌になることもあった。しかし、そのような中でも、自分の相談に親身になって乗ってくれたり、自分が落ち込んでいると励ましてくれたりする先輩もいた。このような先輩の存在を三原も指摘していた。2004年のある試合で三原は、長くプロレスをやっているが、「一度だけプロレスを辞めたいと思ったことがありました。その時根津（仮名）さんが自分を守ってくれまし

た」と、彼女の試合後、リングの傍にいた、三原のかつての先輩だった根津さんに感謝の気持ちを伝えていた（筆者のフィールドノートより）<sup>(4)</sup>。

小田切は、三原にとっての根津さんのような先輩から思いやりをかけてもらったので、今度は自分が人に思いやりをかけることを学んだ。「上からそういうふうにやられたので、あたしも下にはそういうふうにやってあげたい」と思うようになった。

#### 4-3 身体的な強さと精神的な強さ

レスラーたちはプロレスをすることによって強さを得ていた。その強さは身体的な強さ、精神的な強さ、その両方の三つのカテゴリーに分けられる。多くのレスラーは、三つのカテゴリーのどれかに分類されるが、北山だけは三つのカテゴリーのすべてに分類されている。

##### 重たいものは何でも来い

プロレスラーたちが身体的な強さとして挙げていることは、重たいものを運べるようになったり、さらにそれで人の役に立てたことである（6人のレスラーが言及）。

西村玲は以前所属していた団体にいた時、新人レスラーだったので、4-1で記述したように、先輩の荷物をたくさん肩に担いで運んでいた。そのため、どんな重たいものでも自分の肩に掛けて歩ける、という自信を持っている。「ここに、もうなんでも来いみたいな。こんなのは、歩けるぞー、みたいな感じ」だ。また、倉田みどりもレスラーになってから荷物を運ぶのが機敏になったと語る。例えば、車に積んである重たい荷物を手際よく降ろさなければならない時に、レスラーが2、3人いると手際よく降ろし、それを早く運ぶことができる。これはまさに、「プロレスで・・・鍛えられたおかげだな」と思う。「やっぱ、でも荷物持つのは普通の子より持てる」。そのため倉田の実家では、父親に代わって彼女が主に荷物を運んでいる。そんな時、レスラーで良かったと思う。

泉早苗は、女友達と、買い物とかパーベキューとかに行くと、自分のところに自然と重たいもの

が回ってくるので、それを持ってあげていると語る。女友達からは「男の子と買い物してるみたいとかよく言われます」。香坂真実は、レスラーになって普通の女の子よりは力が付き、重いものをより運べるようにはなったと思う。ある時、「外人のおばさん」が地下鉄の入り口で、多くの手荷物を抱えて、階段を降りようとしていた。荷物が、「すごい重そうで、大変で、それをなんか、手伝えてあげて、下までよいしょよいしょって運んだらそのおばさんがびっくりして、あっ、アンビリバーボーみたいな」ことを言っていた。

北山佐和子は、二、三年くらい前に受けた、ホームヘルパー二級の資格を取るための病院での実習で、高齢者にひとりで対応させられた。一緒に実習に行った友達は、看護師と一緒に付き添って実習していたのに、自分には看護師が「北山さんは〇〇さんやってくれる」と当然のようにひとりでまかされた。そうやって「頼られると、やっぱ、やりがいがあるし。お年寄りも、やっぱ体おっきいと安心してくれる」と思う。このことで、レスラーとして体を鍛えていて良かったと思う。

桑名は力持ちでよかったと語っている。一人で買い物に行き、たくさん買って荷物が重くなってもだれの助けも必要としない。普通の女性だったら持って歩けないだろうから、自分は力があってよかったと思う。また、パチンコをした後、パチンコの玉がぎっしり入った籠を四つ、普通に持ってパチンコ店の中を歩いていたら、「ゆってければ持ちますのにー」と言いながら、慌てて店員さんがやってくる。この時も力があってよかったと思う。

重たいものが軽々と持てるのは、西村が述べているように、新人レスラーの時の訓練のたまものである。新人レスラーは、長時間の筋肉トレーニングをして基礎体力をつける。その上、プロレス興業の時は、先輩の荷物を担ぎ、巡業用のバスへの荷物の上げ降ろしをする。また、重たい鉄柱や木の板を数枚重ねて担ぎ、リングの設置や解体を何回となく繰り返す。これが、レスラーたちの荷物を運ぶことの自信につながっている。

## 精神的に強くなった

一方で、6人のレスラーが、精神的な変化を指摘し、その中でも5人のレスラーが、精神的に強くなったことを指摘していた。山本好江は、レスラーになってから精神的に強くなったと語る。それは、嫌なことがあっても、それをリングに持ち込まないようになったからである。しかし、どんな職業に就いている人でも、長く仕事をしていると、私的な感情を仕事に持ち込まないようにすると予想できる。したがって、この点は、プロレスという職業からの独自の影響とは言えない可能性がある。

北山は、プロレス界に入る前は気が弱かったと思うが、この世界でもまれて、気が強くなったと思う。それも、周囲から気が強いといわれていた同期レスラーに、負けないくらい気が強い自分を発見した。その事に自分でも驚いている。東は、プロレスラーになる以前は引っ込み思案だったが、プロレスラーになってから挑戦する姿勢ができて、明るくなったと語っている。

飛石さやかは、レスラーになってから人付き合いがうまくなったと考えている。もともと人見知りをする性格だった。そして、レスラーになる前は、嫌なことがあるとそれを顔や態度に出していた。しかし、4-1で述べたように、プロレス団体に入って、先輩との上下関係に組み込まれたので、先輩を立てたり、先輩との関係で嫌なことがあっても自分の感情を抑えることを学んだ。結果的に、嫌な事に対して我慢強くなり、「前は我慢できなかったことが今は全然我慢できる(ママ)」ようになり、「それは良かった」と思っている。桜井真澄も、4-1で述べたような新人時代の厳しい練習もあるが、それ以上に、やはり4-1で言及した先輩との厳しい上下関係に耐えることで、現在つらいことに直面しても、いままでのつらい思い出を振り返り、「昔のほうが大変だったから大丈夫」と考えられると語る。

他のレスラーとは異なり、神川富子は、精神的な強さではなく、精神面での変化を指摘する。彼女は自分の感情が激しくなったかもしれないと語る。プロレスをするようになってから「やっぱり

負けたときは悔しいとか、勝ったときはうれいって」気持ちを強く持つようになった。プロレスをやるまでは、激しく喜んだり、激しく悔しいと思うことがなかったと思う。

### 体の強さと気持ちの強さ

3人のレスラーは、自分が得た強さを、精神的側面と身体的側面で分けて語っていた(松原美夏, 坂本, 葉山)。北山は、身体的な強さと精神的な強さを結び付け、自分の強さとして表現はしていなかったが、上述したようにプロレスをすることによって二つの強さを得ているので、このカテゴリーにも分類される。

松原美夏は、受け身を取れる体の強さに加えて、気持ちの強さが合わさって、自分は強くなったと思うと語る。レスラーになる前だと、「もう投げられただけで多分もう起きあがれなく」なっていたと思う。レスラーになった今は、力を加えられてもうまく力を逃がすことができるし、受け身を習得したおかげで、階段から落ちて「頭も打たなかったし、骨折もしてない」と語る。このような体の強さに加えて、気持ちの強さが、体に加わった痛みに耐えられるようにしている面もあると語る。この気持ちの強さは、4-1で述べたような、新人時代の雑用や先輩との序列的な人間関係を耐えることで、簡単に物事を無理だとあきらめなくなり、やりぬくことで培われたと思う。松原は、気持ちの強さと体の強さが二つ合わさって、自分の強さになっていると述べている。

坂本由美子も二つの強さを語っている。彼女はまず精神的に強くなったと思っている。それは、「やりたいと思ったことは絶対やり通す」というところである。この言葉には、彼女が様々な紆余曲折を経てながらも、プロレスラーに成る夢を最終的に成就したことを指すと思われる。一方で身体的には、普通の人よりは体力はあると思っている。その証拠に、「エスカレーターよりも・・・階段を選んで、・・・ピョピョンっとう上がってく。そういう・・・自分を見て、ああ、まだまだ大丈夫かなと思う」。

葉山理恵は、プロレスができるようになったこ

とで、すごく自信を得たと語る。体は強くなったし、精神的にも強くなったので、両方の側面から自信を得ている。精神的な側面では、プロレスラーになる以前、自分は、何か失敗や挫折があると、すぐ部屋にひきこもってしまうような子供だったが、レスラーになってから、失敗しても簡単にあきらめなくなった。がんばれば結果はついてくると思えるようになったと語っている。

### 4-4 身体的受動性の変容

筆者は2008年の論文(合場 2008)で、女子プロレスラーが、プロレスにより闘う技能(自分の身体に対する男性による暴力へ対抗するための身体的技能)を獲得することで、自らの身体的受動性(他人に対して穏やかに接し、相手を不快にせず、自分の身体に対する侵害に対して受け身であること)を変容させているか否かを考察した。

分析の結果、レスラーの一部は闘う技能を獲得することによって、身体的受動性を変容させていた。闘う技能を暴力への対応に直接使っているレスラーはごく少数だったが、痴漢に言葉で対峙したり、痴漢にあっている女性を情緒的に力づけたりするレスラーが存在した。また、痴漢や男性からの暴力に遭遇したことはないが、闘う技能の獲得によって、暴力に遭遇した場合に対抗できるという自信を獲得しているレスラーも認められた。

このようにレスラーたちは、プロレスをするために団体に所属し、プロレスをすることで、礼儀正しさや人への思いやり、身体的、精神的強さを得ていた。さらに、身体的受動性を変容させて、日常生活で遭遇する暴力に対抗したり、対抗への自信を得ているレスラーがいた。次に、レスラーたちがプロレスをすることによって被っている不利益について検討する。

### 4-5 かわいい服との決別

ここで言う「かわいい服」というのは、洋服にかわいさが具現化されているものである。かわいさとは、「親しげでわかりやすく、容易に手に取ることの出来る心理的近さが構造化されている」(四方田 2006: 76)ものであり、具体的には、

小さいものや幼げなもの（少女的なもの）、懐かしいものは、「かわいい」と認識される（四方田 2006）。したがって、本稿でかわいい服というのは、形状が小さいものや、幼げな要素や懐かしい要素を持っている服を意味する。

レスラーになってからの服装の変化について言及した 22 人の内、レスラーになる前の洋服の好みは、インタビューからは特定できなかった者が 9 人、かわいい服に関心があった者が 9 人、かわいい服には関心がなかった者が 4 人だった。かわいい服に関心があるという意味は、常にかわいい服を着ているという傾向だけではなく、普段はくだけた格好が好きでそのような格好が多いが、時にかわいい服を目にすると着てみたくなるという傾向も含んでいる。かわいい服に関心がなかった 4 人は、男っぽい格好（南）、ボーイッシュな格好（小田切）、スカートをはかない（桜井、坂本）という好みである。

レスラーになる前の洋服の好みは特定できた 13 人のレスラーの中で、レスラーになってから洋服の好みは、かわいい服装からそうでない服装に変化したり、逆に、かわいい服装ではないものから、かわいい服装に変化したと語ったレスラーは皆無だった。かわいい服は女性向けに製造されていることが多いので、多くの女性が着るサイズに身体が合わないと、かわいい服が着られないということになってしまう。レスラーたちは筋肉と脂肪をつけ、その目指す身体のありかたは少なくとも「痩せた」身体を目指す方向ではない（合場 2007）。したがって、基本的な洋服の好みは変化していないが、レスラーの身体を獲得したことで、かわいい服が物理的に着られなくなり、他の服装に変わったことを語るレスラーが多かった。

### かわいい服が入らない

レスラーになる前から、かわいい服に関心があった名取は、レスラーになってから体が大きくなったため、普段女の子が着るようなかわいい T シャツなどは、着られなくなったと語る。無理に着ると T シャツがピチピチに引っ張られてしまうからだ。インタビューの時の彼女の服装は、灰色

の綿素材で作った、フードつきのトレーナーに、水色のパンツと黒いスニーカーというカジュアルなものだった。

西村もレスラーになってから、かわいい服が着られなくなったと話す。ラフな格好は好きだが、かわいい服にも目がいくことがある。

（かわいい服を自分の体に）あててみたら・・・自分の体がはみ出てるんですね。悲しいと（笑い）思うんで。なんでこんなにいつもちっちゃい服ばかり作るんだよって（笑い）。むかついてんですけど。

西村はかわいい服に自分の体が入らないことを「悲しいと思う」と言いながら、笑っている。それは、レスラー以外の女性はこんなに体を大きくしないから、服は小さくても構わないので、レスラーである自分が着られないのは当然と考え苦笑しているように思われる。かわいい服が着られないことを深刻に考えているのではなく、レスラーをやっている以上「仕方がないこと」と捉えている。インタビューの時は 2 回とも、彼女の基本的なスタイルは同じだった。ブラウスの下にタンクトップを着て、下はパンツだった。かわいい服ではなく、カジュアルな服を着ていた。

松原もレスラーになってから、着られる服が制限されてきた。普通の洋服店の一番大きいサイズならなんとか入るが、サイズが合わないので着られない服もある。また、ジーンズは、ウエストに合わせて買おうとすると、太股がひっかかって入らない。太股に合わせて買おうと、ウエストが大きすぎて格好悪くなってしまった。しかし、このような状態を「レスラーっぽくて」嫌な反面、レスラーをやっている以上しょうがないと松原は思っている。そのかわり、一旦レスラーを辞めたら自由に洋服が着られると思っている。それに、松原の場合は全く市販の婦人服が入らないわけではないので、その中で着られる服を着れば良いと思っている。

インタビューの時の彼女の服は、黒いタンクトップに黒の V 字のカーディガン、その下はジーンズというもので、これ自体はかわいいものなどは思えなかった。しかし、もともと彼女の身長は

レスラーとしては低く、筋肉や脂肪がたくさん付いているようには見えない体型と、洋服以外の所での装いでかわいらしさを追求しているように見えた。例えば、髪を金色と茶色に染め、肩ぐらいに伸ばし、その毛先がわざと不揃いにカットされていた。胸元には、星の形のペンダントヘッドが付いた、シルバーのネックレスを着け、ルイ・ピトンのショルダーバッグを持ち、右手に縦長の大きな指輪をはめていた。化粧をし、手にピンクのマニキュアを、足に同じ色のペディキュアを塗っていた。

レスラーになる前からかわいい服に関心があった9人のレスラーのほとんどは、かわいい服が着られなくなったことにあまり執着していなかったが、最もそのことに拘りをもっていたのが市川昭子だった。彼女は、はっきりと、「一応は、かわいらしい服着てみたいっていう願望はある」と語る。しかし、自分の体型に合うかわいい服のサイズがない。かわいい服を試着するとき、自分の体が大きいので洋服が肘で止まったりする。そのことを西村と同じように「悲しい」と表現する。かわいいと思う服が入らないので、自分の体に合う服ということになると、「どうしても腕が通るものとかが、ラフなものばかり着ちゃうんですよ。ジーパン、短パンとか。Tシャツとか」になってしまう。現実には、レスラーをやっている以上、筋肉や脂肪を体につけなければならないので、かわいい服を着ることは市川にはできない。したがって、せめて、かわいくなくても、「ある程度はちゃんとしなきゃ」と考えている。それは、下記の市川と他のレスラーとのやりとりから、垣間見ることができる。

ブーツ履いたときにチャックしまんないんだよって会話を（他の選手と）するんですよ（笑い）。（他の選手は）ブーツ履くほうがおかしいやんってゆうんですけど。いや、だって履きたくない？ってゆうか、・・・レスラーはレスラーのがたいであっていいんですけど、人から見られる職業なんで、やっぱりいろんな意味の身だしなみって、必要な一

しかし、実際は、「ほとんど、楽、楽（らく、らく）な格好で、出入り（ではいり）しちゃうんですけどね、いろんな所を」と語る。インタビューの時も、1回目はTシャツにだぼっとした黒い短パンをはいていた。2回目は、ジャージの上下だった。しかし、2回とも、彼女の茶髪の髪はきれいになどつけられ、眉毛の形は整えられ、少し光る薄いピンクの口紅をしていて、だらしない感じは受けなかった。彼女は、インタビューで語っているように、できる範囲で身だしなみを整えていた。これは、合場（2008）の中で語っているように、レスラーとしても、人に憧れられる存在にならなければという意識から、見だしなみに気をつけようとしていると解釈できる。

次に、レスラーになる前の好みに関わらず、市販の女性服が入らなくなったレスラーたちが、どのように自分の装いの問題に対応しているかを検討する。

#### かわいい服に代わる装い：人に見られても恥ずかしくない格好

市川と同じように、レスラーであることを日常生活でも意識して、服装に気をつけているレスラーに、葉山と桑名がいる。この二人はレスラーになる前の好みは不明であるが、レスラーになってから服装を変更せざるを得なくなっている。

葉山もレスラーになってから体が大きくなり、市販の婦人服が入らない時もあったが、それでも大きいサイズの店を探して、女らしく装うようにしたという。また、団体での自分のレスラーとしてのキャラクターは、「大人の色気」を意識したものになっているのに、お客さんが「普段男らしい格好」をした自分をみたら「ちょっとさめる」と思うので、そのイメージを崩さないように日常生活でも女らしい服装をしている。

女らしい服装を心がけている理由のもうひとつは、かつて団体の男性コーチだった音山氏（仮名）から、「女子レスラーはリング上では男でいろって。普段は女でいろってゆうんですよ。女を忘れたら女子レスラーじゃないって。絶対普段はおしゃれをしてなさいって。女らしくいなさいって」言わ

れたからである。入団してからは暫く、ジャージで街を普通に歩いていた。音山氏に言われてから、普段もなるべく小奇麗な格好をするようにしている。実際、インタビュー時も、ロングスカートを履き、女らしい格好をしていた。

葉山のようにしたくとも、実際大きなサイズの婦人服でも入らないレスラーの場合は、女らしく装うことには限界がある<sup>6)</sup>。これを他の方法で解決したレスラーが桑名だった。

彼女も以前は、スウェットのような「貧乏くさい格好」をしていたが、アメリカでプロレスをやってから、「いつ人に見られてもいい格好にしなきゃいけない」と思い、形は「シンプルだけどー、生地がいいものにしたたり」するようになった。なぜなら、桑名によるとアメリカのプロレス界では、プロレスがパフォーマンスとして広く認識されているので、レスラーも芸能人と見なされている。芸能人は人々から憧れる存在であるので、日常生活でも人々の夢を壊さないような格好が求められているという。また、日本では体が大きくなると着る服がなくなり、おしゃれができなかったが、アメリカでは大きなサイズがあるので選択の幅があると語る。

インタビューの時の彼女の服装もシンプルなものだった。髪は肩ぐらいまで伸ばし、金髪に染めている。長袖のTシャツに、赤いウインドブレイカーのようなジャケットをはおり、側面に水色の別布が付き、その上に線が3本ぐらい入った、パンツを履いていた。彼女の言うように生地がよいものかどうかは、筆者にはわからなかった。

桑名は日常生活では基本的に「自然体」でいるが、一方でどこかで自分がレスラーであることを知っている人に見られているかもしれないということも心に留めている。このように考えるようになったきっかけは、以前 UFO キャッチャーで獲得したぬいぐるみを抱え、ソフトクリームを食べながら自宅の近所を歩いていたら、不意にレスラーとしての自分を知っている人から声をかけられ、恥ずかしい思いをしたからであった。

### かわいい服に代わる装い：男物の服やジャージ

レスラーになる前の好みにかかわらず、市販の婦人服が着られなくなったレスラーたちは、現実的な選択肢として、男物の服（5人）あるいはジャージを着るようになっていく（4人）。

鶴崎由佳は体重が70キロ台になってから、市販の婦人服が入らなくなった。もともと「女の子っぽい格好をしたい」とは思っておらず、むしろボーイッシュな格好がしたかった。しかし、ボーイッシュな格好でも婦人服は自分には小さいので着られない。そこで結局男物の服を着ている。インタビューの時も、ボーイッシュな服装をしていた。彼女の髪は短く、茶色に染められていた。紺色のTシャツの中央に、アイスホッケーのゴールキーパーがかぶる防御マスクのような白いプリントがしてある。下は、ゆったりしたベージュの短パンで、白いスニーカーを履いていた。ただし、筆者は彼女の身につけているものが男物だと認識はできなかった。東、鶴崎、北山は現実的に男物の服しか入らないので選択の余地なく着ているが、小田切と飛石は男物を着ることにむしろ満足している。

小田切はレスラーになる以前からボーイッシュだったが、レスラーになってから、さらにボーイッシュになった。前にも増してボーイッシュになったのは、男物の服を着るようになったからである。普通の女性のジーンズは、太股が入らない。Tシャツも胸のあたりが「むちむちに」なる。これは多分、胸筋が鍛えられて筋肉がついているからだと思われる。このように、婦人服は体に合わないものが多いが、男物だと何でも着られるのでよく着るようになった。女物が入らなくて寂しいという気持ちはない。なぜなら、もともとスカートは絶対に履かなかったからだという。

インタビュー時の彼女は、ライトグレーの野球帽をかぶっていた。色が白くて痩せていて、ひよろ長い体型である。髪はショートカットで、金色と茶色で染めていた。シルバーのネックレスをし、耳にピアスをしていた。オランダの木靴のように膨らんだ白いスニーカーのような靴を履いていた。赤いジャージの上着にパンツを穿いていた。全体

的な印象として、小田切が表現したようにボーイッシュな印象を受けた。

レスラーになってから服装に変化があったと指摘するのは飛石だ。入団する前は、いくら体が大きくても、男物を着るのは「自分の中で嫌だっという意識があっ」たので、女物を着ていた。しかし、レスラーになり、先輩から「メンズ物」のお下がりをもたらすことが多くなり、それを着ているうちに服装がボーイッシュになってきた。その影響で、そういったボーイッシュな恰好が今度は好きになってきた。今では女物は探さず、最初から男物を探すようになった。女物はサイズが小さいので入らないが、男物の方がデザインが豊富だからだ。女物から、「おっきくてかっこいい服が好きにな」ったと語る。

彼女はインタビューの時に、白い文字が入った黒いトレーナーに、濃い紺色のジーンズを穿いていた。靴はスニーカーで、ショルダーバックを持っていた。筆者は彼女の服装をカジュアルに思ったが、それが男物だとは認識できなかった。

男物の服を着る他に、何人かのレスラーは生活のほとんどをジャージで過ごしている。レスラーになる以前、神川は、女の子だからかわいい服が着たいと思ったりしたが、松原も言及しているように、ジーンズでさえもサイズが合わない。さらに、道場に練習に行くのに片道自転車で1時間30分かかる。そこで練習をして、また自転車で帰る。そのような生活なので、ジーンズよりもジャージの方が楽で機能的なのだ。また休みの日も出かけないので、私服を着る機会もない。このように、かわいい服を着る機会がないし、ジャージの生活が機能的なので、かわいい服を着られないことに特に不満はない。インタビューの時も、黄色のジャージの上下だった。

山本もレスラーになってから、ほとんどジャージで生活するようになったと語る。実際、インタビューの時も、道場での練習直後に行ったということもあり、ジャージの上下を着ていた。

ジャージが正装っていうか、ジャージが普段着でもあり、なんでもジャージ着てますね。家でも、ちょっ

と古くなったジャージを着てて(笑い)、外へ出るときは、外に出るなりのジャージに着替えて、で、ジャージなのに練習するときには練習用のジャージがまたあって、常にジャージを着てるかもしれない。

なぜジャージの生活になるのか？ それは「動きやすいから」だと言う。動きやすい服装が求められるのは、練習も試合もない非常に限られた時間を除いて、一日の生活がプロレス中心で動いているからである。また神川と同じように私服を着る時間もあまりないからである。ここで面白いのは、本人も語っているように、同じジャージという種類だが、新しいジャージは外出したり、プロレス会場に入る時に着て、お古を練習の時や家で着ているところである。ただし、人に会うときには、ジャージではなくジーンズを穿くという。人の目ということを全く無視してはならず、ある程度意識している。

里中亜希はプロレス界に入ってから、ジャージで過ごすことが多くなり、そのことを女らしくないと感じている。しかし、それを深刻に考えてはいない。忙しい時間をやりくりするためには仕方ないと割り切っている。ジャージで過ごすことで、自分の女らしさが脅威に晒されるようなことはないと思っている。神川や山本は、ジャージで過ごすことを女らしさとの関係で捉えてはなかったが、里中は意識の中に、女らしさとジャージで過ごすことを対立するものと捉えていた。しかし、ジャージで過ごす実利の方を、ジャージで過ごさないことで表現される女らしさよりも選択していた。インタビューの時は、雪が降っていたので、ジャージではなく、黒のジーンズのようなものを穿いていた。

#### 4-6 男性に間違えられる

##### 男性と認識される特徴

8人のレスラーが男性に間違えられた経験を語った。自分たちが男性に間違えられたのは、特定の特徴を持っていたからだ。レスラーたちは語っている。短い髪を指摘したレスラーが6人、楽な格好(Tシャツにジーンズの格好)が5人、大きな

体が3人であった。レスラーの回答は複数の種類に言及しているものがある。

まず、短い髪には後ろを刈り上げるヘアースタイルも含まれている。北山は新人の頃、自分の髪の手入れをする暇もないくらい忙しかったので、髪の毛を短くし、さらに刈り上げていた。そのため男性に間違えられたと語る。女子プロレスラーは新人の頃、長時間の練習、団体の雑用をこなすために汗をかくことが多く、そのために髪を短くしているレスラーが多い。例えば、1995年（平成7年）に発行された『女子プロレスグランプリ』（ソニー・マガジズ）のvol.5では、「平成6年組」（p.67-p.71）というタイトルで、1994年に各女子プロレス団体に入団した新人レスラーたちを特集している。この特集の中で、他の団体に所属したことがない、純粋に新人と言える11人のうち、髪の毛の長さが肩よりも長いのは、全女に入団した田村欣子のみであった。

次に、レスラーの語りによると、身体の性が女性の人が、短い髪と楽な格好を表示すると、その人間をジェンダー分類の男性と認識する人がいることがわかる。例えば、黒田あやは、街でよく「お兄さん」と呼ばれることがあったという。それは彼女の身体に筋肉がついているなど、男性と認識される身体を持っていたからではなく、服装がTシャツとジーパンで、髪が短く、ときどき刈り上げてしていたので、男性に間違われたと語っている。

男に間違えられる三番目の特徴の大きな体には、広い背中、高い身長、横幅があることなどが含まれる。飛石は、自分が男に間違えられるのは、外見と身体的特徴のためだと語る。自分は、髪もあまり長くないし、体も結構大きいし、「こんな広い背中した女いない」ので、多分男と思われていると語る。

### 男性に間違えられたときの反応

飛石は、自分が男性に見られていると感じ、気まずい思いをしたことがある。ある日、駅で女性専用車両に乗っていると、他の女性たちが自分を男性だと思って「すごい（ママ）みんなジロジロ

見て」いた。そこに、たまたま女性専用車両なのに乗りに込んでくる男性たちがいた。すると、駅員がその男性たちに、この車両は女性専用だから降りてくださいと声をかけ、男性たちは慌てて降りていった。その間、飛石は「もちろん女ですから、こう下向いて、こう何かやって」降りないでいた。駅員は飛石に声をかけずに去っていった。そこで、彼女は安心する。「ああ、みんな周りは分かったろうな、これでと思って。（私は女ですと）暗黙の了解させるんですよ、周りに（笑い）。どうみたいな」と語る。

北村はタッグを組んでいたレスラーとある時、綺麗なドレスを着て、六本木を歩いていた。男のキャッチセールスが後ろから「きれいなおかま」と声をかけてきたので、すぐ振り返って、「女だよ」と抗議すると、キャッチセールスが驚いて「うわ〇〇（タッグチームの名前が入る）だっ」と言った。「おかま」は女装した男性を指す用語である。つまり、この男性は、北村を男性で女性の格好をしている人と認識したのだ。

男性と間違えられて、特に不快な思いをするのは、彼女たちが街の女子トイレに入ろうとする時である。三原幸を除く7人が女子トイレでの経験を語っている。7人の中で、男性に間違えられて最も恥ずかしい気持ちを持っていたのが、飛石だった。駐車場のトイレに入ろうとすると、「なんか止められたりとかすることもあつた（笑い）。あと、そうですね。変な顔して見られたりとか」がある。一度、カラオケボックスの女子トイレに入ろうとしたら、「兄ちゃん、そこ違うよって男の人から言われたんですよ（笑い）」と語る。しかし、その男性の言葉を無視してそのまま入っていった。男性に間違えられたときは、「恥ずかしくな」る。あんまり自分を男だと言わないでと思う。自ら「自分は女です」と言うのも恥ずかしいので、何か言われても無視するようにしている。

坂本も、女子トイレに普通に入ったら、「あれ、男の子向こうだよーってゆわれたときはすごい（ママ）嫌な」気持ちだった。また、女子トイレで順番を待っているとき、他の女性に上から下まで見られたりすることがある。しかし、出て行け

と言われたことはない。また、他の女性がトイレにいる自分を見て、間違っただけで男性トイレに入ったのかと思い、無言で出て行って、トイレの表示を確認して、また入ってくることもある。そして、坂本を女なのか男なのか疑問に思っていることがある。しかし、そういうことはよくあるので、もう慣れてしまって、気にしないようにしていると語る。

気にしないようにしても、女子トイレを使うたびに、他人を惑わせたり、じろじろ見られたり、トイレを間違えていると指摘されるのはストレスになる。北山は新人の頃、女子トイレでのそのような経験が煩わしくなり、どうせ女子トイレは男子トイレに比べて混んでいるので、男子トイレを使うようにしていたという。新人の頃、男性に間違えられていたのは、髪が短くかつ刈り上げていて、体も大きく、背も高かったからだと思っている。北山の場合も、女子トイレに並んでいると、他の女性たちから不審な目で見られることはあった。しかし、北山は胸が豊かだったので、他の女性たちはその胸を発見し、最終的に北山を女性と判断し、彼女に注意するようなことはなかったと北山は考えている。

以上のレスラーたちは、自分の外見から他人が自分の性別を間違えるのは当然なので、それにどう対処するかということが語りの中心だった。対照的に、倉田だけは、自分の性別を間違える他人への反発を語った。他のレスラーと一緒にいるときに、男性に間違えられると気にならないが、ひとりの時に、「公衆トイレとかで、おっかい声で、ここ違うわよっておばさんにおっかい声で怒鳴られたりとかすると、すごい恥ずかしい」。おばさんには、「ばばあー、てめーとか思う」し、他の女性にみられて「ちょーいやだ」。でも、それで引き下がらない。「女です」と行ってトイレを使うと語った。

最後に、レスラーの語りの中で、利益とも不利益とも言えない変化があった。

#### 4-7 化粧をしなくなった

レスラーになってからの変化として、ふたりのレスラーが化粧をしなくなったことを挙げている。

神川は高校時代、過剰なほど化粧をしていたのが、レスラーになってからだんだん化粧をしなくなったと語る。また流行などを気にしなくなってしまった。団体に入った頃は、「道場に行くときにまゆ毛とかも描いてた」。それはもともと眉毛がなかったからである。しかし、練習している間に汗で眉毛が取れてしまう。それでも暫くは眉毛を描いて練習に参加していたが、「やっぱり練習が厳しくなっていくと、そんなことかしてられなくなって、今じゃ全然」しなくなってしまった。道場を行き来するとき、化粧をしていない姿を自分がレスラーだと知っているだけに「見られてるってゆったら見られてるんだろうけど、ちょっとそういうところは大きっぱ」になってしまっている。インタビューの時も、素顔だった。

香坂も高校時代は、友達の影響もあり、好奇心もあって化粧を楽しんでいた。しかし、プロレス団体に入団し、練習以外はひとりで行動することが多くなり、彼女の「面倒くさがり屋」の性格から、化粧を積極的にやろうとしなくなった。特にデビュー前までは練習に明け暮れ、化粧をする必要のない環境だったこともあり、化粧をすることから遠のいてしまった。現在も、道場に行くことが多く、その場合は練習して帰ってくるだけなので、普段は化粧をしていない。実際、インタビューの時も、化粧はしていなかった。

## 5. 考察

### 5-1 先行研究との比較

レスラーたちの語りから浮かび上がった、プロレスの経験による利益と不利益を先行研究と比較してみよう。第一に、レスラーたちも先行研究で指摘されているような現実的利益一すなわち重たい物を人の助けを借りず自分で動かすことができる一を身体的力との関係で言及していた。さらに、レスラーたちは重たい物を自在に操ることで、自分に身体的強さがあると認識していた。この点は、Blinde et al. (1993) が研究した女性競技者も指摘している。さらに、身体的強さではなく、精神的強さを得たと語るレスラー、また両方の強さを得

たと語るレスラーもいた。Blinde et al. (1993) が研究した女性競技者も、自分自身を有能だとみなしており、その中の一要素として、スポーツ以外の困難な状況を統制できるという認識が含まれているので、彼女たちも精神的な強さを得ていると思われる。

Dowrkin (2003) は、街頭で暴力に遭遇しても、そこから逃げられるという自信をあげていた。同様の傾向がレスラーにも認められた。闘う技能の獲得によって身体的受動性を変容させたレスラーもいた。そのため、身体的受動性をプロレスラーになってから変容させた者の内、一部のレスラーたちが、痴漢や男性からの暴力に遭遇したことはないが、闘う技能の獲得によって、暴力に遭遇した場合に対抗できるという自信を獲得していた。

一方、先行研究で言及されていない利益—すなわち礼儀正しさと人への思いやり—をレスラーたちは得ていた。それは彼女たちが、プロレスそのものを行うことからではなく、プロレス団体という特有の組織に身を置いたことによって生じている。また厳しい先輩との序列的な関係から、礼儀正しさと人への思いやりを得るレスラーがいる一方で、飛石、桜井、松原、北山はその関係に耐えることから、精神的強さを得ていた。

プロレスから得ている利益については、次のような批判も予想される。すなわち、25名のレスラーをインタビューしたにも関わらず、礼儀正しさを得たレスラーは6名、精神的強さを得たレスラーは6名など、それぞれのカテゴリーごとの利益を得たと答えているレスラーは過半数に達していない。これでは、プロレスから多くのレスラーが利益を得ていると結論づけられないという批判も想定できる。しかし、少なくとも一種類の利益を得たと回答しているレスラーは、25名の内、20名に上っている。一方で、不利益のみを語ったレスラーはいなかったため、この点において、レスラーはプロレスから不利益よりも利益を得ていると結論づけることができる。

先行研究が指摘した身体活動によって生じる不利益のほとんどは、レスラーによっては指摘されなかった。プロレスをやっているとレズビアン(女

性同性愛者)だと決めつけられる、ということ語るレスラーはいなかった。この理由はそもそも、女性の同性愛が非常に不可視なものになっているからである(掛札 1992)。これは、日本社会が女性の同性愛の考えや実践を認めているからではなく、むしろ女性は自分の性的な欲求を認識できず、そのセクシュアリティは男性によって最終的に決定されるという強い信念の上に、女性の同性愛が無にされているからである(掛札 1992; 竹村 1997)。

また、プロレスに参加するために時間や金銭がかかることを語るレスラーもいなかった。レスラーのほとんどが未婚者であるということもあり、Migliaccio and Berg (2007) の女性競技者が指摘した、家族責任とスポーツの両立の難しさを指摘するレスラーはいなかった。また、他人から特定のスポーツをやっていることに対して、否定的なコメントをされることについては、少数のレスラーが、他人からプロレスをやっていることに関して否定的なコメントされることを、別な質問に対応して語っている。しかしこの点は、レスラーになってからの変化に結びつけて語られていない。したがって、Migliaccio and Berg (2007) の女性競技者と同じように、レスラーも、この点をプロレスラーになったことの不利益として指摘しているとは解釈できない。

レスラーになってからの様々な変化の中で、利益にも不利益にも当てはまらないものが、化粧をしなくなったという点である。この点は、先行研究では言及されていない。

## 5-2 エンパワーメントとしての身体的強さの獲得

プロレスを通じて身体的強さを獲得したレスラーたちとは対照的に、現代日本の多くの女性は身体的強さやそれに基づく自信を獲得していない。その傾向は、十代の少女の頃に始まり、思春期に強まり、成人の女性に引き継がれていくと考えられている。その理由を、身体的強さを身につける手段の一つとしてスポーツへの参加において考察してみよう。

まず、中学校の部活動への参加割合は、男子が

約 62%，女子が約 55%と男子の方が大きいものの、小学校の時に比べると、男女とも急増している（井谷 2004）。しかし、高校に入ると、女子に著しい運動部活動離れが起きていることが指摘されている（井谷 2004）。

この事象を生み出す社会的構造について、日本社会に関する研究は乏しいので、アメリカでの研究を活用しながら説明していく。スポーツ参加がジェンダー化されているのは、多くの少年にとって、スポーツでの能力は彼らの社会的地位の決定において重要な要素となっているが、少女にとっては、身体的魅力が彼女らの社会的地位を決定する傾向にあるからである（Adler et al. 1992; Canaan 1987）。少女たちが獲得すべき身体的魅力は特定の形態をしている。それは非常に痩せていて、引き締まって、非の打ちどころがなく、完全に均整のとれた身体である（Duncan 1997）。少女たちは思春期の遙か前から、様々な大衆的なメディアから、そのような理想の女性身体を学んでいる（Duncan 2007）。したがって、少女たちは、理想の女性身体とは異なる身体を生み出すようなスポーツには参加したがるなくなる（Duncan 2007）。例えば、レスラーたちが指摘していたような、重たい物が持てるような筋力が身に着くスポーツに参加すると、理想の女性身体から逸脱してしまうので、その種のスポーツには参加しない。その結果、重たい物が持てることを通じて獲得できる自信をも得ることができなくなる。

このように、女性が身体的強さを身につけることが阻害されている現状の中で、身体的強さを獲得したレスラーたちは、「エンパワメント」したとすることができる。「エンパワメント」の概念は、発展途上にあり、分野によっても定義が異なり、さらに多様な定義の間の整合性がないことが指摘されている（久木田 1998；佐藤 2005）。しかし、久保田（2005）は、先行研究から少なくとも幾つかの「エンパワメント」概念の特性があると主張している。第一に、「エンパワメント」とは、何らかの理由で本来持っている力を十分に発揮できない人々を対象に「力を付ける」過程をさす（久保田 2005：27）。筆者は、この「本来持っ

ている力」を「潜在能力」と呼ぶ。第二に、エンパワメントによって「付ける力は、権力ではなく、自信など自らの能力を発揮できる力をさす」（久保田 2005：27）。最後に、エンパワメントの過程には、心理、社会、政治、経済的要素が含まれ、最終的には社会変革を志向している（久保田 2005）。したがって、エンパワメントをすることは、単純に、強くなることを意味しない。

現代日本社会では、多くの女性が自らの身体的強さという「潜在能力」を発揮していない状態にあり、その中で、レスラーたちはプロレスをすることで、多くの女性が獲得できていない「潜在能力」としての身体的強さを獲得しているので、その意味で「エンパワメントし」と解釈することができる。

### 5-3 男性に間違えられることの利益と不利益

身体活動とジェンダーの領域における先行研究では、女性競技者たちが男性に間違えられることで経験する利益や不利益については指摘されていなかった。

本研究のレスラーたちは、意識的な選択として、敢えて男性に間違えられるような外見を獲得したわけではない。レスラーを目指した結果、図らずも男性に間違えられる身体を獲得してしまったのである<sup>(6)</sup>。したがって、男性に間違えられることが彼女たちに利益を与えるという認識を語るレスラーはいなかった。ただ、自分が他人から男に思われているので、夜道で襲われることはないと言っているレスラー（三原）がいた。この場合も、レスラーになったことの思わぬ副産物として、このような事態が起こったというニュアンスで語られていた。レスラーたちは、男性に間違えられることの利益をほとんど意識していないので、むしろ男性に間違えられることをどちらかというとな煩わしいこと、否定的なこととして捉えていた。

### 5-4 女として認めてほしいという認識とジェンダーの規範

日本では、かわいい服を着ることが女らしさの表現の一つになっている。そして、一部のレスラー

はその影響を受けていた。しかし、かわいい服が着られなくなったことを、大きな不利益だと捉えているレスラーは市川だけだった。松原のように、今は着られないが、レスラーを辞めたら着られるので問題ないと言っているように、今はレスラーであることを優先しているのだから、かわいい服を着ることを棚上げして、深刻に考えていない。かわいい服を着ることに執着せず、男物の服やジャージを着ることで、かわいい服が着られない問題を解決していた。

一方で、身体が大きくなってかわいい服が自分の身体に合わなくなっても、かわいい服への関心が消えないということは、かわいい服を着て自分の女らしさを表現したいという気持ちを持ちつづけているということである。これは、男に間違えられて不快に思うレスラーの気持ちと繋がっている。つまり、男に間違えられて不快に思うレスラーは、自分は女性であるというジェンダー・アイデンティティ（自分の性を女あるいは男あるいは他の存在としてとらえる、「自分の性に関するアイデンティティ」(中村 2005:58))を持っているので、どんな格好をしようとも、自分を女性として認めてほしいという気持ちを持っているのである。

日本社会における身体の性とジェンダー・アイデンティティに関する規範の一つは、身体の性とジェンダー・アイデンティティとジェンダーの手がかり (gender clues) が一致しなければならないというものである。ジェンダーの手がかりとは、ある人間が特定のジェンダー分類に所属することを示唆する手がかりを意味し、「身体的特徴、行動様式、パーソナリティの傾向」(Devor 1989:147) が含まれる。自分を女性として認めてほしいという気持ちを持ちながらも、男性に間違えられるレスラーたちは、女性であるということを他人に認識させるジェンダーの手がかりを示していないため、図らずも男性に間違えられている。したがって、彼女たちは意識的ではないが、結果的に、身体の性が女性ならば、女であるということを表示するような服装や髪形、体型を示さなければならない、というジェンダーの規範に対抗していることになる。

## 6. 結論

レスラーたちは、プロレスをする身体を獲得したことで、図らずも男性に間違えられるようになったり、かわいい服が着られなくなるという不利益を経験していた。しかし、その不利益を深刻に受け止めるレスラーは非常に少数であった。一方で、プロレス団体に所属することによって礼儀正しさや人への思いやりを、プロレス団体への所属とプロレスをすることで身体的かつ(あるいは)精神的強さを得ていた。さらに、プロレスによって闘う技能を獲得したことにより、身体的受動性を変容させていた(合場 2008)。特に、レスラーたちはプロレスをすることで、多くの女性が獲得できていない潜在能力としての身体的強さを獲得し、エンパワーメントしていた。

スポーツを含む身体活動が、それに参加する女性の日常生活や人生にどのような影響を及ぼすのかについての日本社会における考察を、本稿が最初に行った。今後は、参加する身体活動の種類によっても、女性競技者が得る利益や不利益は変化する可能性があるのだから、幅広い身体活動の領域での同種の研究が必要である。

ジェンダー・アイデンティティとジェンダーの手がかりとしての身体的特徴との関係では、男性に間違えられるレスラーたちは、女であるということを表示するような服装や髪形、体型を示さなければならないという日本社会のジェンダーの規範に、意識的ではないが対抗していた。この点は今後のジェンダー研究に新しい視点を提供するものである。なぜなら、一見、ジェンダーの規範に適合的に見える男女でも、本稿の女子プロレスラーのように、ジェンダー規範を脅かす行動を取っている可能性があるからである。本稿では、身体の性とジェンダー・アイデンティティが一致している女子レスラーに焦点を当てたが、身体の性とジェンダー・アイデンティティが一致している男性についても、ジェンダーの規範を脅かす行動をしているのか否かについて研究する価値がある。

本研究は、平成 15 年～平成 16 年度科学研究費補助金 基盤研究 (c) (2) 「変容する身体とジェンダー：日本の女子プロレスラーの考察」(研究代表者 合場敬子) 及び、2003～2005 年明治学院大学国際学部附属研究所支援研究プロジェクト「前近代と近代社会におけるジェンダー・身体・セクシュアリティの考察」(研究代表者 合場敬子) により実施した。

## 注

- (1) 筆者もこの点については、合場 (2007) で考察している。
- (2) 筆者は多様な視点から女子プロレスラーの身体とジェンダーの関係を考察している。本稿はその研究プロジェクトの一部であるため、必ずしも本稿に關係のない、多様な質問を女子プロレスラーに行った。
- (3) 対抗戦とは、当時存在した 4 つの女子プロレス団体、全日本女子プロレス、JWP、LLPW、FMW の女子部 (FMW は男子の団体だったが、女子部に複数の女子レスラーが所属していた) によって 1992 年 9 月以降行われるようになった、団体の枠を越えたプロレス興行のことである (亀井 2000)。開始されたのは 1992 年であったが、大規模な会場で試合が行われ、女子プロレス人気が盛り上がった時期は、1993 年から 1994 年である (『Lady's 週刊ゴング』2003 年 5 月 14 日)。本稿は対抗戦の時期を、この 2 年間としている。この対抗戦の時代以降、入団する新人の数や所属レスラーの数が少なくなり、キャリアがあるレスラーでも、新人と共に団体運営のために仕事をしなければならなくなった。これにより、団体内の序列的な関係はそれ以前よりは少し緩んでいる。
- (4) フィールド・ノートの日付を記すと、どの試合なのか特定され、それによって、三原と根津がだれかが特定される危険があるので、敢えてここでは記さない。
- (5) もちろん、自分の体型に合わせた注文服を作る方法もあるが、レスラーたちはこの方法にほとんど言及しなかった。
- (6) 筋肉がついた身体に魅せられたレスラーも存在した。例えば、プロテスト前の練習の過程で、筋肉を一つつけると、他にもつけようとして「自分がナルシストになっていくのが分かった」と雪下は語っている。しかし、彼女が憧れたのはボディビルダーのような筋肉だけの脂肪がついていない身体であり、それは筋肉と脂肪がついているレスラーの身体とは異なる。また、レスラーになる動機として、レスラーのような身体を獲得したかったからという理由を挙げているレスラーはいなかった。

## 文献一覧

### (日本語)

- 合場敬子 2007 「変容した身体への自己認識－女子プロレスラーの身体とジェンダー」『スポーツとジェンダー研究』5:4-17.
- . 2008 「闘う技能と自己防衛－女子プロレスラーの身体とジェンダー」『Gender and Sexuality』3:3-22.
- 井谷恵子 2004 「女性のスポーツ嫌いとはスポーツ離れ」飯田貴子・井谷恵子編著 『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店.
- 掛札悠子 1992 『「レズビアン」である、ということ』河出書房新社
- 亀井好恵 2000 『女子プロレス民俗誌－物語のはじまり－』雄山閣出版
- 久木田純 1998 「エンパワーメントとは何か」久木田純・渡辺文夫編集『現代のエスプリ』11:10-4.
- 久保田真弓 2005 「エンパワーメントに見るジェンダー平等と公正－対話の実現に向けて－」『国立女性教育会館研究紀要』vol.9:27-38.
- 佐藤寛 2005 「援助におけるエンパワーメント概念の含意」佐藤寛編『援助とエンパワーメント－能力開発と社会環境変化の組み合わせ－』アジア経済研究所
- 竹村和子 1997 「資本主義とセクシュアリティ－[ヘテロ]セクシズムの解体へ向けて」『思想』No.879:71-103.
- 中村美亜 2005 『心に性別はあるのか？～性同一性障害のよりよい理解とケアのために～』医療文化社
- 四方田犬彦 2006 『「かわいい」論』筑摩書房

### (英文)

- Adler, Patricia A., Kless, Steven J. and Adler, Peter. 1992. "Socialization to Gender Roles: Popularity among Elementary School Boys and Girls," *Sociology of Education* 65:169-187.
- Blinde, Elaine M. and Taub, Diane E. 1992. "Homophobia and Women's Sport: The Disempowerment of Athletes," *Sociological Focus* 25(2): 151-166.
- Blinde, Elaine M., Taub, Diane E. and Han, Lingling. 1993. "Sports Participation and Women's Personal Empowerment: Experiences of the College Athlete," *Journal of Sport & Social Issues* 17(1):47-60.
- Canaan, Joyce. 1987. "A Comparative Analysis of American Suburban Middle Class, Middle School, and High School Teenage Cliques," George Spindler and Louise Spindler eds., *Interpretive Ethnography of Education*, Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum, 385-406.
- Doworkin, Shari I. 2003. "A Woman's Place in the...Cardiovascular Room?? Gender Relations, the Body, and the Gym," Anne Bolin and Jane Granskog eds., *Athletic Intruders: Ethnographic Research on Women, Culture, and Exercise*, Albany: State University of New York Press, 131-158.
- Duncan, Margaret. 1997. "Section III: Sociological Dimensions," The President's Council on Physical Fitness and Sports

- Report, *Physical Activity & Sport in the Lives of Girls*, 71-83.
- . 2007. “Chapter 3 Sociological Dimensions of Girls’ Physical Activity Participation,” The 2007 Tucker Center Research Report, *Developing Physically Active Girls: An Evidence-based Multidisciplinary Approach*, 29-50.
- George, Molly. 2005. “Making Sense of Muscle: The Body Experiences of Collegiate Women Athletes,” *Sociological Inquiry* 75(3):317-345.
- Granskog, Jane. 2003. “Just ‘Tri’ and ‘Du’ It: The Variable Impact of Female Involvement in the Triathlon/Duathlon Sport Culture,” Anne Bolin and Jane Granskog eds., *Athletic Intruders: Ethnographic Research on Women, Culture, and Exercise*, Albany: State University of New York Press, 27-52.
- McCaughey, Martha. 1997. *Real Knockouts: The Physical Feminism of Women’s Self-Defense*, New York: New York University Press.
- Migliaccio, Todd A. and Berg, Ellen C. 2007. “Women’s Participation in Tackle Football,” *International Review for the Sociology of Sport* 42(3):271-287.
- Thing, Lone F. 2001. “The Female Warrior: Meanings of Play-Aggressive Emotions in Sport,” *International Review for the Sociology of Sport* 36(3):275-288.
- Scott-Dixon, Krista. 2008. “Big Girls Don’t Cry: Fitness, Fatness, and the Production of Feminist Knowledge,” *Sociology of Sport Journal* 25:22-47.